

# ダニエル書 - 第一百七十八番

預言的な対応：終末時代におけるダニエル書11章の展開

Jeff Pippenger

2024-04-08

ダニエル書第十一章十六節から十九節は、アメリカ合衆国において間もなく制定される日曜法から、ミカエルが立ち上がり、人類の恩恵期間が閉じられる時に至るまでの歴史を表している。したがって、これは同じ章の四十一節から四十五節の歴史をも表している。

しかし、彼に立ち向かって来る者は自分の意のままに行い、彼の前に立つ者は誰もいない。彼は麗しい地に立ち、その手によってそれは滅び尽くされる。彼はまた、自分の王国のすべての力をもって入ることに心を定め、正しい者たちも彼と共にいる。彼はそのように行い、女たちの娘を彼に与えて彼女を墮落させようとするが、彼女は彼の側に立たず、彼のためにもならない。その後、彼は顔を島々に向け、多くを攻め取る。しかし、自分のために立つ一人の君が、彼の加えた侮辱をやめさせる。彼は自ら辱めを受けることなく、その侮辱を彼に返す。それから彼は自分の国の要塞に顔を向けるが、つまずいて倒れ、見いだされなくなる。ダニエル書 11:16-19.

ホワイト姉妹がダニエル書11章の最終的成就について語ったとき、彼女は「この預言で成就した歴史の多くは繰り返される」と述べた。41節から45節は、これらの節の預言的歴史を繰り返している。異教ローマが、まず三つの地理的地域を征服することによって世界を支配下に置いたとき、これらの節は成就した。

「エジプトは北の王アンティオコスの前に立つことができなかったが、アンティオコスもまた、今や彼に向かって来たローマ人の前に立つことができなかった。もはや、いかなる王国もこの勃興しつつある勢力に抵抗することはできなかった。シリアは、紀元前65年にポンペイウスがアンティオコス・アシアティクスからその領有を奪い、シリアをローマの属州としたとき、征服されてローマ帝国に編入された。」

「同じ勢力がまた聖なる地に立ち、それをむさぼり尽くすことになっていた。ローマは紀元前162年、同盟によって神の民であるユダヤ人と結びつき、その時から預言の暦において顕著な位置を占める。しかし、実際の征服によってユダヤを支配下に置いたのは紀元前63年になってからであり、しかもその経緯は次のとおりであった。

ポントスの王ミトリダテス討伐の遠征から戻ったとき、ユダヤの王位をめぐるヒルカノスとアリストブロスの二人が争っていた。彼らの争いはポンペイウスの裁きに付され、彼はまもなくアリストブロスの主張の不当さを見抜いたが、長らく念願していたアラビア遠征を終えるまでこの件の裁断を先送りにし、そののち戻ってきて、公正かつ妥当と思われる形で彼らの問題を決着させると約した。ポンペイウスの真意を見抜いたアリストブロスは、急ぎユダヤに戻って臣民を武装させ、強力な防衛の準備を整え、自らの王位が他者に裁定されることを予見して、どのような危険を冒しても王位を守り抜く決意を固めた。ポンペイウスはこれを厳しく追撃した。彼がエルサレムに近づくと、アリストブロスは自らの振る舞いを悔い始め、出迎えて全面的な服従と多

額の金銭を約束し、事態の收拾を図った。ポンペイウスはこの申し出を受け入れ、兵の分遣隊を率いるガビニウスを送り、金を受け取らせた。ところがその副将がエルサレムに到着すると、城門は閉ざされ、城壁の上から、その都市はその合意を守らないと告げられた。

ポンペイウスは、このように欺かれることを容赦せず、手元に留め置いていたアリストブロスを鎖につないで、直ちに全軍を率いてエルサレムへ進軍した。アリストブロスの支持者は町を守ろうとし、ヒルカノスの支持者は門を開こうとした。後者が多数派となって優勢になったため、ポンペイウスは自由に市内へ入ることを許された。するとアリストブロスの一党は神殿の丘に退き、ポンペイウスがそこを攻略しようとする決意していたのと同じだけの覚悟で、その場所を守り抜こうとした。三か月ののち、突撃に足る突破口が城壁に開かれ、その地は剣の力で制圧された。続く凄惨な虐殺で、一万二千人が殺された。歴史家はこう記している。ちょうど祭儀に従事していた祭司たちが、周囲で仲間たちが虐殺され、ときには自らの血がいけにえの血と混じり合うほどであったにもかかわらず、荒れ狂う騒擾には気づかぬかのように、平静な手つきと揺るがぬ意志でいつもの務めを続けているのを見るのは、胸を打つ光景であった。

戦争を終結させると、ポンペイウスはエルサレムの城壁を取り壊し、いくつかの都市をユダヤの管轄からシリアの管轄に移し、ユダヤ人に貢税を課した。こうしてエルサレムは初めて、征服によって、やがて「栄光の地」を完全に滅ぼし尽くすまで鉄の支配下に置き続けることになるその権力の手に乗せられた。

第17節。彼はまた、その全王国の力をもって入ることに心を定め、正しい者たちを伴う。彼はこのようにする。すなわち、彼は彼に女たちの娘を与えて彼女を墮落させる。しかし彼女は彼の側に立たず、彼のためでもない。

ニュートン主教はこの節について、意味をより明確に表していると思われる別の読みを示している。次のとおりである。「彼はまた、武力によってその全王国に侵入することを決意するであろう。」第16節では、ローマ人がシリアとユダヤを征服するところまで話が進んだ。ローマはそれ以前にマケドニアとトラキアを征服していた。アレクサンダーの「全王国」のうち、ローマの権力に服属していないまま残っていたのは、今やエジプトだけであった。このローマの権力は今や、その国に武力で侵入することを決意した。

プトレマイオス・アウレテスは紀元前51年に死去した。彼は、王冠とエジプト王国を、その長男プトレマイオスと娘クレオパトラに遺した。彼の遺言には、彼らが互いに結婚し、共同して統治すべきことが定められていた。しかも彼らは年少であったため、ローマ人の後見の下に置かれた。ローマ人民はその委託を受け入れ、ポンペイウスを、エジプトの若き相続人たちの後見人に任命した。

まもなくポンペイウスとカエサルの間で争いが起こり、両将は有名なファルサスの戦いを交えた。敗れたポンペイウスはエジプトへ逃れた。これを追ってカエサルも直ちにそこへ向かったが、カエサルが到着する前に、ポンペイウスは、プトレマイオスの後見人に任ぜられていたにもかかわらず、そのプトレマイオスによって卑劣にも殺害された。そこでカエサルは、プトレマイオスとクレオパトラの後見人としてポンペイウスに与えられていた任を引き継いだ。エジプトは内紛で騒然としており、プトレマ

イオスとクレオパトラは互いに敵対し、彼女は政権への参与を奪われていた。にもかかわらず、カエサルは騎兵800、歩兵3200からなる小勢を率いてためらわずアレクサンドリアに上陸し、争いの事情を把握してその解決に乗り出した。騒乱は日増しに激しくなり、カエサルは自軍の小勢ではこの地での立場を維持できないと悟った。さらに、その季節には北風が吹いていたためエジプトを離れることもできず、アジアへ使者を送り、その方面にいる自軍のすべての部隊に、できるだけ早く救援に来るよう命じた。

彼はきわめて尊大な態度で、プトレマイオスとクレオパトラに対し、軍を解散し、両者の争いを解決するため自分の前に出頭し、さらに自分の裁定に従うよう命じた。エジプトは独立の王国であったため、この尊大な命令はその王国の威信への侮辱と受け取られ、激昂したエジプト人は武器を取った。これに対しカエサルは、彼らの父アウレテスの遺言に基づいて行動しているのだと応じた。アウレテスは子らをローマの元老院と人民の後見の下に置き、その全権は今や執政官たる自分に付与されている。そして後見人として、彼には両者の間を裁定する権利があるのだ、と。

ついにこの件は彼の前に持ち出され、双方の当事者のためにその弁を取る弁士が任命された。偉大なローマの征服者の弱点を承知していたクレオパトラは、どんな弁士を雇うよりも、自らの美貌をもってその場に臨むほうが、自分に有利な裁きを得るのにいっそう有効だと判断した。人目につかずに彼の前に出るため、彼女は次のような計略に訴えた。衣服の包みに身をすっぽり伸ばして横たわり、シチリア人の従者アポロドロスがそれを布で包み、革紐で縛り、ヘラクレスさながらの肩に担ぎ上げてカエサルの居室を目指したのである。ローマの将軍への贈り物だと称して、彼は城砦の門から中へ通され、カエサルの前に進み出て、その荷を足元に降ろした。カエサルがこの生きた包みを解くと、なんと、美しいクレオパトラが彼の前に立っていた。彼はこの計略に不快を覚えるどころか、第二ペテロ2:14に描かれているような性質の持ち主でもあったので、ロランの言うように、かくも美しい人物を初めて目にしたその瞬間に、彼女が望んだとおりの効果が彼に及んだ。

カエサルはついに、遺言の趣旨に従い、兄妹が共同で王位に就くべきだと裁定した。宰相ポティノスは、クレオパトラを王位から追放するうえで主導的な役割を果たしていたため、彼女の復位の成り行きを恐れた。そこで彼は、いずれクレオパトラに単独の権力を与えるつもりだと民衆にほのめかして、カエサルへの嫉妬と敵意を煽り立て始めた。まもなく公然たる反乱が起こった。アキラスは2万人の軍勢を率いて進軍し、カエサルをアレクサンドリアから追い払おうとした。カエサルは、わずかな兵を市内の通りや路地に巧みに配置し、攻撃を撃退するのに何の苦もなかった。エジプト側は彼の艦隊を破壊しようとして企てた。これに対し、彼は彼らの艦隊を焼き払って報復した。炎上する艦船の一部が埠頭の近くに押し流され、市内のいくつかの建物に延焼し、約40万巻を収蔵していた著名なアレクサンドリアの大図書館が焼失した。

戦況がいっそう切迫するなか、カエサルは周辺の諸国すべてに援助を求めて使者を送った。小アジアからは彼を支援するために大艦隊が到来した。ミトリダテスはシリアとキリキアで編成した軍を率いてエジプトへ向かった。イドマヤ人アンティパトロスもユダヤ人3,000人を率いて彼に合流した。エジプトへ通じる峠を押さえていたユダヤ人は、軍の進行を妨げることなく通過を許した。彼らのこの協力がなければ、計画全体

は失敗していたに違いない。この軍の到着が戦いの勝敗を決した。ナイル川近郊で決定的な会戦が行われ、結果はカエサルの完全勝利に終わった。逃亡を図ったプトレマイオスは川で溺死した。こうしてアレクサンドリアとエジプト全土は勝者に服した。これによりローマは、アレクサンドロス大王の旧王国の全域に進出し、これを吸収した。

本文の「正しい者たち」とは、疑いもなく、先に述べた援助を彼に与えたユダヤ人を指している。この助けがなければ、彼は必ずや失敗していたであろう。これによって、彼は紀元前47年、エジプトを完全にその支配下に服させた。

『女たちの娘、彼女を墮落させる。』カエサルがクレオパトラに抱いた情熱（彼は彼女との間に一子をもうけた）は、あの危険きわまりないエジプト戦役に乗り出した唯一の理由であったと、歴史家は述べている。このため彼は本来の用務が求める以上に長くエジプトに留まり、放蕩な女王とともに饗宴と酒色にふけり、夜を徹して過ごした。『しかし』と預言者は言った、『彼女は彼の側に立たず、彼のためにもならない。』その後クレオパトラは、アウグストゥス・カエサルの敵であるアントニウスに与し、ローマに敵対してその全権勢を振るった。

「18節。こののち彼は島々に顔を向け、多くを征服する。しかし、彼自身のために一人の将が立ち、彼が与えた侮辱をやめさせ、彼自身は辱めを受けることなく、その侮辱を彼に向け返す。」

キンメリアン・ボスポロスの王ファルナケスとの戦争は、ついに彼をエジプトから引き離した。「敵のいるところに到着すると」とプライドーは言う、「彼は自分にも彼らにもいささかの猶予も与えず、ただちに攻撃をかけ、彼らに対して完全な勝利を収めた。その顛末を彼は友人に次の三語で書き送った。Veni, vidi, vici（来た、見た、征服した）。」この節の後半はやや不明瞭で、その適用については意見が分かれている。これをカエサルの生涯のより前にさかのぼって適用し、ポンペイウスとの確執にその成就を見いだす者もいる。しかし、予言の中で明確に示されている前後の出来事が、次の節に示されるように、この予言のこの部分の成就を、ファルナケスに対する勝利とローマでのカエサルの死との間に求めることを私たちに余儀なくさせる。この時期のより充実した歴史が明るみに出れば、この箇所の適用を支障なく行えるような出来事が浮かび上がるかもしれない。

「第19節。そののち、彼は自分の国の要塞に顔を向ける。しかし、彼はつまずいて倒れ、見いだされなくなる。」

「この征服の後、カエサルは、ポンペイウス派の最後に残っていた残党、すなわちアフリカにおけるカトーとスキピオ、ならびにスペインにおけるラビエヌスとウォルスを打ち破った。ローマ、すなわち『自国の要害』に帰還すると、彼は終身独裁官に任ぜられ、さらに他の諸権能と栄誉とを授けられた結果、実質において全帝国の絶対的主権者となった。しかし、預言者は彼がつまずいて倒れるであろうと言っていた。この表現は、彼の没落が、人が歩行中に偶然つまずくように、突然かつ予期せぬものであることを示唆している。果たして、五百回の戦いを戦って勝利し、千の都市を奪い、百十九万二千人を殺したこの人物は、戦場の喧騒と闘争の時に倒れたのではなく、自らの進む道が平坦で花を敷きつめられていると思ひ、危険ははるか遠くにあると見なされていたその時に倒れたのである。というのも、黄金の王座に着いて元老院議場に

座し、その議会の手から王の称号を受けようとしていたとき、突如として裏切りの短剣が彼の心臓を突いたからである。カッシウス、ブルトウス、その他の共謀者たちが彼に襲いかかり、彼は二十三の傷を受けて倒れた。このようにして、彼は突如としてつまずき、倒れ、そして見いだされなかった。紀元前44年。」ウリア・スミス『Daniel and the Revelation』258-264頁。

北の王である異教ローマが王座に据えられたという歴史的成就是、まもなく到来する日曜法において生起する三重の結合の中で現代ローマが王座に就く歴史を予表する歴史である。その歴史はまた、五三八年に教皇制が初めて王座に据えられた時を示している第三十節から第三十六節にもおいて典型的に表されている。第十六節から第十九節、そして第三十一節から第三十六節は、いずれもテュロスの淫婦の最終的な興隆と滅亡を表している。その歴史はまた、最初の北の王が三つの地理的領域を征服した後に確立された第五節から第九節にも表されていた。その後、彼は南の王と条約を結んだが、その条約を破り、それに応じて南の王は致命的な傷を与え、北の王はエジプトの捕囚のうちに死んだ。

5節から9節、16節から19節、そして30節から36節は、40節から45節で成就する三つの予言の系列を提示している。ホワイト夫人が「この預言において成就した歴史の多くは繰り返される」と指摘したとき、それは実際には、この章全体が40節から45節の内容を例証していることを意味していた。20節から22節はキリストの誕生と死を示しており、彼の誕生は1798年と1989年の双方における終わりの時を表し、そして十字架での彼の死は1844年10月22日と日曜法を表している。

二十三節は、マカバイ反乱の時代におけるユダヤ人とローマとの同盟を示している。その歴史における「同盟」は、紀元前161年と紀元前158年という日付によって表される。マカバイの歴史は、ユダヤ人の側から開始されたローマとマカバイ派ユダヤ人の「同盟」を起点とする内部的な流れを表し、最終的にはユダヤ人が「我々にはカエサルのほかに王はない」と宣言することで終わる。もちろん二十三節は二十一節と二十二節に続いており、二十一節はキリストの誕生を指し示していて、これは預言上の終わりの時であり、二十二節は十字架を指し示していて、それは日曜法を表している。

十字架において、ユダヤ人はカエサル（ローマ）を自分たちの王と認めた。また、二十三節の「同盟」は、ユダヤ人がローマに仕えることを選び始めたことを指しており、まさにユダヤ人がローマへの忠誠を宣言し終えるその時点で始まった。十字架において象徴されるユダヤ人の終わりの後には、ユダヤ人のローマとの結び付きの始まりが続く。

二十四節から三十節は、紀元前31年のアクティウムの海戦から、330年のローマからコンスタンティノープルへの遷都に至るまで、異教ローマが絶対的に支配した三百六十年間を述べている。この三百六十年は、教皇ローマが絶対的支配を行った千二百六十年を象徴しており、両者を合わせると、四十一節に始まる、まもなく到来する日曜法の際に生じる三者連合から、恩恵期間の終わりに至る時期を表している。

第十一章におけるすべての予言的歴史の筋は、ダニエル書十一章の最後の六節と一致しているが、1989年の「終わりの時」から始まり、40節において表され、41節の「日曜法」に至るまでの予言的歴史こそが、「終わりの日々に関するダニエルの予言のその部分」である。40節で空白にされているその歴史とは、時が近づいたとき、まさに猶予期間が

閉じる直前に封印が解かれるイエス・キリストの黙示である。

次回の記事でこの研究を続けます。

私たちは神の戒めと、イエス・キリストの証し、すなわち預言の霊を持っている。神の御言葉のうちには、価に替えがたい宝石が見いだされる。この御言葉を探求する者は、心を澄ませておくべきである。飲食において、ゆがんだ食欲に決してふけてはならない。

もし彼らがこれをするなら、頭は混乱し、この地球の歴史の終末の場面に関係する事柄の意味を見いだすために深く掘り下げることによる負担に耐えきれなくなるだろう。

ダニエル書とヨハネの黙示録がよりよく理解されるとき、信者たちは全く異なる宗教的経験をしようになるであろう。彼らには、開かれた天の門を垣間見るような啓示が与えられ、心と思いは、心の清い者への報いとして与えられる祝福にあずかるために誰もが培うべき品性が深く刻みつけられるであろう。

主は、謙遜で柔和な心をもって黙示録に明らかにされた事柄を理解しようとするすべての人を祝福される。この書には、永遠に関わる偉大さと栄光に満ちた事柄が非常に多く含まれており、熱心にこれを読み、探り求める者はみな、「この預言のことばを聞き、その中に書かれていることを守る者たち」に与えられる祝福を受ける。

黙示録を学ぶなら、あることが必ず分かる—神とその民との関係は密接で、しかも確固たるものである。

天の世界とこの世の間には、驚くべきつながりが見いだされる。ダニエルに啓示された事柄は、その後、パトモス島でヨハネに与えられた啓示によって補完された。これら二つの書は注意深く研究されるべきである。ダニエルは二度問うた、「時の終わりまで、あとどれほどの時があるのか」と。

「私は聞いたが、理解できなかった。そこで私は言った、『ああ、わが主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか。』すると彼は言った、『ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉じられ、封じられている。多くの者が清められ、白くされ、試される。しかし悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには理解する者がいない。だが賢い者は理解する。日ごとのいけにえが取り去られ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられる時から、千二百九十日がある。待ち望み、千三百三十五日に至る者は幸いである。しかしあなたは終わりまで自分の道を行きなさい。あなたは休み、終わりの日に自分の割り当てを受けて立つことになる。』」

書物の封印を解き、この終わりの時代に起こるはずの事柄の啓示をヨハネに与えたのは、ユダの部族の獅子であった。

ダニエルは、第一の天使のメッセージが私たちの世界に宣べ伝えられる終わりの時まで封印されていたその証しを担うために、定められた持ち場に立った。これらの事柄は、この終わりの時代において無限の重要性をもっている。しかし、「多くの者が清められ、白くされ、試みられる」一方で、「悪しき者は悪を行い、悪しき者のうち理解する者はない」。まことにそのとおりである！罪とは神の律法に対する違反である。

そして、神の律法に関する光を受け入れようとしなない者は、第一、第二、第三の天使のメッセージの宣言を理解しない。ダニエル書はヨハネへの啓示の中で封印が解かれ、この地の歴史の最後の場面へと私たちを導いていく。

「私たちの兄弟たちは、私たちが終わりの時代の危険のただ中に生きていることを心に留めているだろうか。ダニエル書と関連づけて黙示録を読みなさい。これらのことを教えなさい。」『牧師への証言』114、115。